

伊豆の長八美術館からの手紙 松崎町の建物に残る長八作品—その1. 近藤邸

伊豆の長八美術館漆喰文化アドバイザー 齋藤 金次郎

近藤家は松崎町中宿通にあり、屋号が大阪屋で元禄12年（1699）より薬種商を営んできた名家である。初代平八郎は若い頃から東京へ出て、医薬分業の仲間と共に薬の調剤を薬剤師がおこなえるように、政府に建白書を提出した、日本薬学会の名誉会員でもあった。また明治10年に長男として生まれた平三郎は東京帝国大学（現東京大学）薬学科を卒業後にドイツに留学し、帰国後は母校の薬学科主任教授となり、昭和12年には日本薬学会会頭を務めます。更に28年には日本学士員会員となり、33年に文化勲章を受賞しています。

この近藤家は主屋を中心に海鼠壁の土蔵が敷地の奥まで連なっており、その景観が松崎町の中でも知られ、後方の浄泉寺に続く路地は「なまこ壁通り」とも呼ばれ、よくポスターや雑誌等で取り上げられています。主屋は木造2階建てで、切妻、棧瓦葺きとなっています。外壁は典型的な塗屋造りで海鼠壁の大壁仕上げとなっております。正面1階は1間程度前に張り出し、窓は縦長の上げ下げで、玄関廻りは洋風意匠となっています（写真1、2）。

長八の作品としては、現在残っている作品の中でも遺作中のいさくと言われる、5～6年がかりで完成させた明治8（1875）年61歳の時に製作した、漆喰塑像「神農像」があることでも知られている（写真3）。裏面には長八直筆の落款印章が明記されています（写真4）。他にも、「恵比寿・大黒天像」の塑像が残っています



写真1 正面



写真2 海鼠壁通り



写真3 神農像

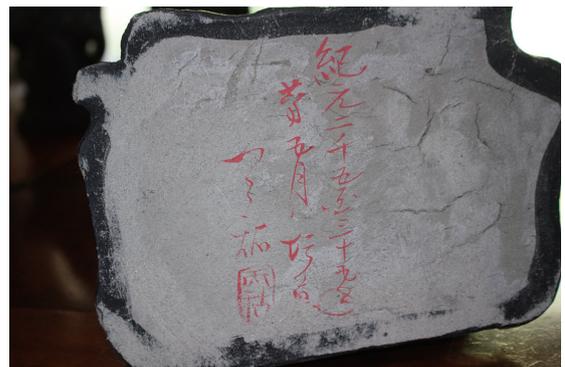


写真4 神農像長八落款印章



写真5 恵比寿・大黒天像



写真6 ランプ掛けの「からすうり」



写真7 ランプ掛けの「秋の実」



写真8 バッタとキリギリス部分

(写真5)。保存されていた、箱の蓋裏には明治13（1880）年6月に近くの春城院の作品製作時に造ったと墨書きされています。

次に建物内の鍍絵作品としては、主屋1階に「からすうり」と「秋の実」図のランプ掛けが取付けられ、2階踊場にも「雀」のランプ掛けの漆喰鍍絵が描かれています。作品の製作年代はいずれも不明となっております。言い伝えによると、明治20年に呉服商家として建てられ、現在松崎町民族資料館として一般公開されている中瀬邸を手がけた大工が引続いて明治20年に建てたとされています。周囲の煤けた状態等から推測して、一階の「からすうり」と「秋の実」の鍍絵は建設当初からあったものと思われる。共に2階天井板から針金で吊り下げて固定しています。よって、両作品は他で製作したものと思われる。また図柄の漆喰の盛り上げが少ないことも長八の鍍絵としては珍しい作品と言えます。作品を紹介しますと、「からすうり」は外輪の中に漆喰でレリーフ状にからすうりの葉と実さらには鼠を2匹描いています（写真6）。現状では彩色は施されていないようです。構図の内容として考えられることはからすうりは日本の山野に自生するうり科のつる性多年草で実は形状が大黒様のお腹のように膨らんでいることから、昔から縁起がよいとされています。まして中国では医薬原料として用いられ、日本でも実から取れるエキスがしもやけの薬として、また特殊な例としては喘息の薬としても使用されていたようです。鼠の存在は文献等によると大黒天神の使者であり、吉兆を表す動物としても扱われているようです。次に「秋の実」になります。代表的な鍍絵としては、戸田松城家の「果実（秋の実）」ランプ掛けの作品を挙げることができますが、ここでの作品は華やかさが少ないことが特徴的です（写真7）。恐らく、部屋全体とのコンストラクションを考えたものと思われる。図柄はからすうりと同様に外輪の中につる科の植物を描き、それに秋の実りである、柿・桃等を描き、よく見ると蝶々を初めとしてバッタやキリギリスの昆虫類を施している、長八作品の中でも貴重な鍍絵であると思われる（写真8、9）。

一方、「雀」のランプ掛けは、階段を上った2階踊場天井に施されている。正面には灯りを取るための窓が

外部機関活動報告



写真9 蝶々部分の拡大



写真10 2階階段手摺



写真11 天井入隅部分



写真12 2階ランプ掛けの「雀」



写真13 雀部分の拡大



写真14 笹の部分の拡大

設けられ、階段の手摺は洋風となっています（写真10）。壁は真壁で部屋との間仕切は襖とし、小壁欄間は隣室と吹き抜けの和風造りとなっておりますが、雀のランプ掛けが描かれている天井のみは洋風の意匠を意識しており、入隅部分をアール状にし、漆喰塗りの額縁を四方に設け天井全面を漆喰塗りとしています（写真11）。聞くところによると、代々ランプを掛けて使用したことはなく、あくまでも鑑賞用であったとされています。また、2階は来客用の部屋として作られ、襖で仕切られ取り外しことで一つの大きな部屋として使用できるとのことである。雀の図柄は円形の単純な輪郭を施した中に4羽の雀と笹が漆喰でレリーフ状に描かれ、吊り金具を中心に時計回りとは逆に飛翔しています（写真12）。目は黒で頭と羽部分は茶色の彩色が施され、全体の漆喰肉厚や鋲の決め込み等から考えて、長八が現場で行ったものと思われます（写真13、14）。経年変化によって、一部で亀裂が見られますが、当初の姿を留めています。雀と竹のモチーフは日本画の画題の中でも取り合わせが良いことで描かれ、狩野派の絵師は好んで障壁画や掛軸に用いています。よって、狩野派の絵を学んだ長八は近藤家においては絵画的感覚で和と洋の文化を融合した近代和風独特の空間を作りあげています。建物に残る、雀と竹の図柄は明治8年の旧岩科村役場（長八美術館保存）、明治9年の戸田松城家等で見ることができます。しかし、いずれも壁面の鋲絵でランプ掛けの「雀」図としては近藤家のみでしか見られない、最も貴重な作品と言えます。尚、近藤家は現在非公開となっております。

今回の調査では、近藤二郎氏・松崎町役場企画観光課課長八木氏及び一般財団法人松崎町振興公社事務局長関氏にお世話になりました。紙面を持ってお礼申し上げます。

参考文献

- ・松崎町 海鼠壁のある建物 平成14年9月 松崎町教育委員会
- ・郷土の先覚者たち 平成13年 松崎町役場